

〔原 著〕

児童における社会的比較の様態 (2)

—パーソナリティ要因の影響—

筑波大学心理学系：外山 美樹

筑波大学人間学類：伊藤 正哉

Some aspects of social comparison in children (2):
The influence of personality factor

Miki Toyama and Masaya Ito

問題と目的

Festinger (1954) が提唱した社会的比較は「自分と他者とを比較することの総称」と定義されるが、その基本仮定には、①人間には自分の意見や能力を評価しようとする動因がある、②評価のための物理的・客観的手段がない時は、自分の意見や能力を他者と比較することによって自己評価しようとする、③比較する相手としては、自分と類似した他者が一般的に好まれる、の3つの命題が含まれる。つまり、この理論に従うと、私たちは日頃、自分と類似した他者と、意見や能力を、自己評価のために比較を行っている、ということになる。

Festinger (1954) が社会的比較過程理論を提唱してから、半世紀が過ぎようとしているが、その間に社会的比較に関する研究は精力的に行われ、その理論の妥当性を裏づける研究が蓄積されている一方、近年では、社会的比較が、自己査定 (self-assessment)、自己高揚 (self-enhancement)、マスタリー (mastery)、自己呈示 (self-presentation) など、様々な目標に役立つことも指摘されている (ex. Butler, 1989a, 1989b, 1992; Taylor & Lobel, 1989; Wood, 1989)。

このように Festinger (1954) の理論は、多くの実証的研究を生み出しているが、Festinger の社会的比較過程理論をめぐる諸知見の大部分は、青年のしかも大学生という非常に限られた

サンプルを対象としたものであり、大学生以外の発達段階において妥当性を有するかについては、ほとんど検討されないままに経過してきた (高田, 1990)。とりわけ、日本においては、社会的比較過程理論に即した子どもに関する知見は皆無に等しい。

わが国においては、外山 (1999) が小学校4年生から6年生を対象に、社会的比較の実態を自由記述により調査したものがある。その結果、子ども (児童) における社会的比較の様態は、青年 (高田, 1993) のそれとは異なり、発達時期に応じた比較を行う理由や比較の果たす機能があることを指摘している。本研究では、小学校4, 5年生を対象にし、児童における社会的比較の実態を再検討することを目的とする。

また、社会的比較行動の理解においては、パーソナリティの重要性が指摘されている (高田, 1981)。本研究では、パーソナリティ要因として、公的自己意識と自尊感情に焦点を当てることにした。公的自己意識とは、他者から見られる自己を意識しやすい、すなわち、自己の内面や他者に対する言動などに注意を向けやすい傾向である。高田 (1993) が大学生を対象に自己意識の高さの違いによる社会的比較の様態の相違を検討したところ、公的自己意識高群は低群に比し、容姿・外見の比較、友人との比較、不確実性低減のための比較、比較による劣等感、比較に対する否定的感情が記述された割合が有意に多かったことが明らかにされ、児童におけ

る社会的比較の様態においても公的自己意識の影響が大いに関わっているものと考えられる。

自尊感情と社会的比較の関連においては、これまで数多くの実証的研究が行われ (ex. Wayment & Taylor, 1995), 一般的に自尊感情が低い人ほど、社会的比較行動に従事しやすいという結果が得られている (ex. Gibbons & Buunk, 1999)。これは、自尊感情が低い人というのは自己についてより不確かであるため、自分についての情報をより多く得るために、社会的比較行動を求めるということであろうが、自尊感情の要因を交えて、社会的比較の様態まで検討を加えた研究は、これまで見当たらない。本研究で社会的比較の様態の相違を自尊感情の観点から探ることで、なぜ自尊感情の低い人が社会的比較行動に従事しやすいのか、そのメカニズムを明らかにする一助となるものと考えられる。

また、本研究では、学年別ならびに男女別に検討する中で、社会的比較の様態の発達的变化、ならびに性別による違いを探索的に探ることにした。

方 法

被調査児 茨城県内の小学校4年生113名(男子59名, 女子54名), 5年生130名(男子73名, 女子57名)の計243名(男子132名, 女子111名)。
質問紙 (1)社会的比較の様態に関する質問紙: 高田(1993), 外山(1999)にならって、日常生活において日頃経験する, ①比較の相手, ②比較の対象, ③比較を行う時の気分, ④比較の理由, ⑤比較後の気持ち, ⑥他者(親や先生)に友だちやきょうだいと比較されることへの感情についてを自由記述させた。また, ⑦社会的比較, ⑧類似他者との社会的比較, ⑨非類似他者との社会的比較, ⑩継時的比較(少し前の自分との比較), ⑪上方比較(自分より優れている人との比較), ⑫下方比較(自分より劣っている人との比較)の頻度を4段階評定(「1点」…ほとんど比べない, 「2点」…あまり比べない, 「3点」…時々比べる, 「4点」…いつも比べる)で回

答を求めた。

(2)自尊感情尺度: Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の日本語版(桜井, 1993)を子ども用に修正して用いた。10項目で構成されており, 4段階評定(1~4点)である。

(3)公的自己意識尺度: 桜井(1992)による自己意識尺度のうちの公的自己意識尺度を用いた。14項目で構成されており, 4段階評定(1~4点)である。高得点者ほど公的自己意識傾向が強いことを示す。

手続き 上記の質問紙が2000年10月に実施された。調査はクラス単位で行われ, 担任教師が質問項目を読みあげて被調査児に回答させる強制速度法が採用された。

結果と考察

(1) 社会的比較の様態

社会的比較の頻度の4段階評定における平均値(SD)は, 2.14(1.03)であった。「ときどきくらべる」, 「いつもくらべる」と答えた人, すなわち日常生活において何らかの比較をしている児童は39.0%であり, 大学生(77%; 高田, 1993)と比べると少ないことがわかった。また, 小学4・5年生のほかに, 被調査児の半数以上を小学校6年生が占めている外山(1999)の結果(57.3%)と比べても少なかった。本研究においては, サンプルの幅が狭く(4, 5年生のみである), 今後はサンプルの枠を広げた研究が必要である。

比較の相手, 比較の対象, 比較時の気分, 比較の理由, 比較の結果, 他者(先生や親)に比較されることへの感情(以下「被評価感」と示す)についての自由記述への回答は, Masters & Keil(1987), 高田(1993), 外山(1999)を参考にカテゴリー化された(Table 1参照)。

「比較の相手」では“(自分より)できる人”(44.0%)が最も多く, 児童においては上方比較が相対的に行われやすいことがわかった。続いて, “友達”(14.0%)や“同級生(7.8%)”なども相対的に多く, 児童においては生活場面でも利用可能な他者との比較がされていることも明

Table 1 児童における社会的比較の様態

内容	頻度 (%)	内容	頻度 (%)
比較の相手		比較の理由	
できる人	107 (44.0)	理由なし	39 (16.0)
友達	34 (14.0)	競争意識	29 (11.9)
似ている人	21 (8.6)	自己評価	19 (7.8)
同級生	19 (7.8)	自己向上	14 (5.8)
属性を言及	12 (4.9)	自己卑下	13 (5.3)
できない人	10 (4.1)	不確実性の低減	11 (4.5)
きょうだい	8 (3.3)	羨望	11 (4.5)
その他	34 (14.0)	関係配慮	9 (3.7)
		ストレス解消	9 (3.7)
		楽しさ	5 (2.1)
		他者評価	5 (2.1)
		わからない	18 (7.4)
		その他	39 (16.0)
比較の対象		比較の結果	
学業成績	100 (41.2)	肯定的感情	49 (20.2)
運動能力	60 (24.7)	否定的感情	47 (19.3)
外見	26 (10.7)	影響なし	37 (15.2)
創造性・字	10 (4.1)	羨望・嫉妬	15 (6.2)
性格	8 (3.3)	感心・納得	14 (5.8)
生活態度	7 (2.9)	自己向上努力	12 (4.9)
おもしろさ	5 (2.1)	悔しさ	12 (4.9)
特になし	5 (2.1)	同調・模倣	6 (2.5)
遊び	4 (1.6)	わからない	10 (4.1)
その他	40 (16.5)	その他	40 (16.5)
比較時の気分		被評価感	
落ち込んでいるとき	53 (21.8)	否定的感情	65 (26.7)
不特定	48 (19.8)	影響なし	50 (20.6)
幸福感があるとき	22 (9.1)	反感・不満	42 (17.3)
不満足な評価を得たとき	21 (8.6)	肯定的感情	13 (5.3)
ふつうの気分	15 (6.2)	否定予想	7 (2.9)
満足できる評価を得たとき	13 (5.3)	肯定予想	6 (2.5)
評価か下されるとき	13 (5.3)	わからない	6 (2.5)
不確実性を低減したいとき	7 (2.9)	その他	35 (14.4)
羨望を感じたとき	7 (2.9)		
わからない	6 (2.5)		
その他	31 (12.8)		

注) 複数回答による。

らかにされた。また、“(自分と)似ている人”(8.6%)のようにFestingerの社会的比較過程理論と対応する結果も得られた。

ところで、「比較の相手」に関しては自由記述のほかに、(1)自分と似ている人、(2)自分とは似ていない人、(3)少しまえの自分、(4)自分よりもすぐれている人、(5)自分よりもすぐれていない人、についてどれくらいの頻度で比較しているのかを4段階で評定を求めた。その結果、「ときどきくらべる」、あるいは「いつもくらべる」と回答した児童の割合は、“少しまえの自分”

(54.4%)と“自分よりもすぐれている人”(52.1%)で半数以上の割合が確認され、以下、“自分と似ている人”(33.6%)、“自分とは似ていない人”(25.9%)、“自分よりもすぐれていない人”(22.9%)と続き、児童においては下方比較や非類似他者との比較は相対的に行われにくいことがわかった。

「比較の対象」においては、“学業成績”(41.2%)で半数近くの児童が回答しており、児童が学業成績に関して強い関心・懸念をもっていることがうかがえる。これに、“運動能力”(24.7%)、

“外見” (10.7%)と続いたが、これは先行研究(外山, 1999)と対応する結果であった。大学生の結果(高田, 1993)では、“容姿・外見”(23.0%), “能力”(17.7%), “性格”(16.0%)と自己概念を構成する内容が多く、青年と児童では比較の対象が多少異なることが明らかにされた。

「比較時の気分」としては“落ち込んでいるとき”(21.8%), “不特定”(19.8%)の割合が相対的に高かった。“落ち込んでいるとき”に比較をしやすいのは、自己評価の回復を図るため(自己高揚動機, 自己評価維持)に社会的比較が行われていることを示唆しているものと考えられる。

「比較の理由」に関しては“理由なし”(16.1%)が相対的に最も多く、大学生(2.3%; 高田, 1993)に比べて児童は無自覚的に意図なしに社会的比較をしていることがわかった。また、これに“競争意識”(11.9%), “自己評価”(7.8%), “自己向上”(5.8%)と続いており、自己評価欲求、自己高揚動機が社会的比較の動因であるとする結果が得られた。また、自己高揚とは対照的な“自己卑下”(5.3%)もみられた。このように児童においても、Festingerの社会的比較過程理論で扱っている“自己評価”のための社会的比較以外の理由・機能があることが示された。

「比較の結果」については、大学生(高田, 1993)において見られた感情の結果、行動の結果、認知的結果といった多様な回答は見られず、“肯定的感情”(20.2%), “否定的感情”(19.3%)と感情の結果によるものが多かった。

「親や先生が、あなたを誰か(友だちやきょうだいなど)と比べたら、あなたはどのように思いますか」という自由記述の質問(「被評価感」)に回答してもらい、それらをカテゴリー化した。その結果、“否定的感情”(26.7%), “(比較されることへの)反感・不満”(17.3%)が相対的に多く、比較されることに対してネガティブな感情を抱いている者が多いことがわかった。一方で、“影響なし”(20.6%)も相対的に多く、比較されることを気にしない児童もいることがわかった。

(2) 社会的比較の様態に及ぼす公的自己意識の影響

公的自己意識尺度の平均値(SD)は34.94(8.65), α 係数は.85であった。次に公的自己意識尺度得点の平均値に基づいて、被調査児を高群と低群に分割した。2群別に比較頻度、比較の相手、比較の対象、比較の気分、比較の理由、比較の結果、および被評価感における各カテゴリーに該当する記述があった割合を示したのがTable 2である。なお、Table 2では公的自己意識高群・低群による有意(もしくは有意傾向)な人数の偏りが見られないカテゴリーは省いた。

まず、比較頻度に関してだが、公的自己意識の高群は低群よりも比較の頻度が有意に多かった(高群; 2.39, 低群; 1.89; $t=4.60, p<.001$)。公的自己意識の高い人というのは、他者から見られる自己を気にしやすい人であり、妥当な結果と言えよう。

比較の様態については、 χ^2 検定($p<.05$)の結果、公的自己意識高群は低群に比し、“落ち込んでいるとき”の比較、“他者評価”のための比較、比較の結果の“否定的感情”、“悔しさ”が記述された度数が有意に多かった。一方、公的自己意識低群は高群に比し、“きょうだい”と比較する人が有意($p<.01$)に多かった。

公的自己意識の高い人は、ストレス反応や不安・抑うつ感情が高いことが報告されている(外山・桜井, 1998)が、本研究においても公的自己意識高群は低群よりも、“落ち込んでいるとき”に社会的比較をしやすく、比較の結果“否定的感情”や“悔しさ”を感じており、社会的比較の結果、ネガティブな感情を抱きやすいことがわかった。また、“他者評価”や“関係配慮”のための比較など、他者志向的な特徴が公的自己意識高群で有意(“関係配慮”は有意傾向)に多かったことは、「公的自己意識の強い人は他人の目に映る自分の姿に注意を向けるので、他人の評価にも敏感となり、自分が周囲から逸脱した変わった人間と見られるのを嫌う傾向にある」(押見, 1992)という指摘と一致する。

(3) 社会的比較の様態に及ぼす自尊感情の影響
自尊感情尺度の平均値(SD)は25.22(5.80),

Table 2 公的自己意識の高低による社会的比較の様態の相違

	比較頻度	比較の相手		比較の対象	比較時の気分	比較の理由		比較の結果			被評価感	
		似ている人	きょうだい	遊び	落ち込んでいるとき	他者評価	関係配慮	肯定的感情	悔しき	影響なし	影響なし	
公的自己意識	高群	2.39	14(8.4%)	0(0.0%)	3(1.8%)	32(20.8%)	5(3.0%)	7(4.2%)	28(16.9%)	9(5.4%)	11(6.6%)	16(9.5%)
	低群	1.89	6(3.8%)	8(5.0%)	0(0.0%)	18(11.8%)	0(0.0%)	2(1.3%)	14(8.8%)	2(1.3%)	21(13.2%)	28(18.1%)
検定結果	$t = 4.60^{**}$	$\chi^2 = 3.2^{\dagger}$	$\chi^2 = 8.00^{**}$	$\chi^2 = 3.00^{\dagger}$	$\chi^2 = 3.92^{\dagger}$	$\chi^2 = 5.00^{\dagger}$	$\chi^2 = 2.77^{\dagger}$	$\chi^2 = 4.66^*$	$\chi^2 = 4.45^*$	$\chi^2 = 3.12^{\dagger}$	$\chi^2 = 3.27^{\dagger}$	

注) $^{\dagger}p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$.

Table 3 自尊感情の高低による社会的比較の様態の相違

	比較頻度	比較の相手			比較の対象	比較時の気分	比較の理由		比較の結果		被評価感		
		できる人	できない人	属性に言及	外見	落ち込んでいるとき	自己卑下	理由なし	肯定的感情	否定的感情	否定予想	影響なし	
自尊感情	高群	2.04	40(29.0%)	8(5.8%)	2(1.4%)	5(3.7%)	20(15.3%)	2(1.4%)	10(7.2%)	18(13.1%)	16(11.7%)	1(0.7%)	16(11.9%)
	低群	2.14	60(32.8%)	2(1.1%)	9(4.9%)	18(9.8%)	32(18.5%)	10(5.4%)	27(14.5%)	30(16.2%)	28(15.1%)	6(3.2%)	30(16.1%)
検定結果	$t = .78$	$\chi^2 = 4.00^*$	$\chi^2 = 3.63^{\dagger}$	$\chi^2 = 4.45^*$	$\chi^2 = 7.34^{**}$	$\chi^2 = 2.76^{\dagger}$	$\chi^2 = 5.33^*$	$\chi^2 = 7.81^{**}$	$\chi^2 = 3.00^{\dagger}$	$\chi^2 = 3.27^{\dagger}$	$\chi^2 = 3.57^{\dagger}$	$\chi^2 = 4.26^*$	

注) $^{\dagger}p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$.

Table 4 学年による社会的比較の様態の相違

	比較頻度	比較の相手		比較の対象	比較時の気分	比較の理由		比較の結果	被評価感
		できる人	属性によれる人	創造性・字	なし	他者評価	ストレス解消	羨望・嫉妬	肯定的感情
学年	4年生	2.37	63(36.6%)	9(5.2%)	8(4.7%)	5(2.9%)	8(4.6%)	12(6.9%)	10(5.9%)
	5年生	1.95	44(25.0%)	3(1.7%)	2(1.1%)	0(0.0%)	1(0.6%)	3(1.7%)	3(1.7%)
検定結果	$t = 3.27^{**}$	$\chi^2 = 3.37^{\dagger}$	$\chi^2 = 3.00^{\dagger}$	$\chi^2 = 3.6^{\dagger}$		$\chi^2 = 5.00^*$	$\chi^2 = 5.44^*$	$\chi^2 = 5.40^*$	$\chi^2 = 3.75^{\dagger}$

注) $^{\dagger}p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$.

Table 5 性別による社会的比較の様態の相違

	比較頻度	比較の相手	比較の対象	比較時の気分			比較の理由		比較の結果		被評価感		
				華やかさがあるとき	落ち込んでいるとき	羨望を感じているとき	競争意識	自己向上	関係配慮	影響なし	否定的感情	否定予想	影響なし
性別	男子	1.95		15(9.0%)	19(11.4%)	1(0.6%)	20(11.6%)	11(6.4%)	2(1.2%)	25(14.5%)	22(12.9%)	6(3.5%)	38(22.2%)
	女子	2.38		7(4.3%)	34(21.0%)	6(3.7%)	9(5.1%)	3(1.7%)	7(3.9%)	12(6.8%)	43(24.4%)	1(0.6%)	12(6.8%)
検定結果	$t = 3.31^{**}$			$\chi^2 = 2.90^{\dagger}$	$\chi^2 = 4.24^*$	$\chi^2 = 3.57^{\dagger}$	$\chi^2 = 4.17^*$	$\chi^2 = 4.57^*$	$\chi^2 = 2.77^{\dagger}$	$\chi^2 = 4.56^*$	$\chi^2 = 6.78^{**}$	$\chi^2 = 3.57^{\dagger}$	$\chi^2 = 13.52^{**}$

注) $^{\dagger}p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$.

α 係数は.78であった。次に自尊感情尺度得点の平均値に基づいて、被調査児を高群と低群に分割した。2群別に比較頻度と、比較の相手、比較の対象、比較の気分、比較の理由、比較の結果、および被評価感における各カテゴリーに該当する記述があった割合を示したのが Table 3 である。なお、Table 3 では自尊感情高群・低群による有意（もしくは有意傾向）な人数の偏りが見られないカテゴリーは省いた。

比較頻度に関しては、自尊感情高群と低群のあいだで有意な差は見られなかった（高群；2.04, 低群；2.14； $t = .78$ n.s.）。先行研究では、自尊感情の低い人ほど社会的比較に従事しやすいことが報告されている（Gibbons & Buunk, 1999）が、本研究ではそのような結果は支持されなかった。これが方法上の違い（実験 v.s. 質問紙）によるものか、対象の違い（青年 v.s. 児童）によるものか、はたまた文化差によるものか本研究のみでは定かではなく、さらなる検討が必要とされる。

比較の様態については、 χ^2 検定 ($p < .05$) の結果、自尊感情低群は高群に比べ、“できる人”との比較 ($p < .05$)、“属性を言及”との比較 ($p < .05$)、“外見”の比較 ($p < .01$)、“自己卑下”のための比較 ($p < .05$)、比較の結果の“理由なし” ($p < .01$)、被評価感による“影響なし” ($p < .05$)、が記述された割合が有意に多かった。

自尊感情低群というのは、自分に肯定的感情が抱けない、自分に自信がない人たちであるが、自尊感情が高い人に比べて、“自己卑下”のために自分よりできる人と社会的比較を行いやすく、そのため、社会的比較の後に“否定的感情”を抱きやすい（有意傾向ではあるが）ものと考えられる。そのためにさらに自尊感情を低めるというフィードバック・サイクルができあがり、そのサイクルからなかなか抜け出せない可能性が考えられる。

自尊感情の低い人が高い人よりも、他者から比較をされても影響がないと答える人が多いのは、自尊感情の低い人による防衛機制なのか、あるいは、あまりにも低い自尊感情のために他者から評価されることに無力になっているのか、

本研究の結果からだけではわからない。

ところで、山本・松井・山成（1982）は、大学生においては容貌の側面における自信が自尊感情に大きく影響を及ぼしていることを報告している。本研究の社会的比較の様態の結果（Table 1 参照）も考慮してみると、児童においても“外見”が多く比較の対象となっていたが、自尊感情の低群において特にそうであり、自分の外見の評価・認知が自尊感情に影響を及ぼしている可能性が示唆される。

以上のことより、自尊感情の高低の差によって、社会的比較を行う頻度自体に違いは見られないが、社会的比較の様態においては大きな違いが見られることが示された。

(4) 社会的比較の様態に及ぼす年齢の影響

学年ごとに比較頻度、比較の相手、比較の対象、比較の気分、比較の理由、比較の結果、および被評価感における各カテゴリーに該当する記述があった割合を示したのが Table 4 である。なお、Table 4 では学年による有意な人数の偏りが見られないカテゴリーは省いた。

比較頻度に関しては4年生のほうが5年生よりも多いという結果が得られた（4年；2.37, 5年；1.95； $t = 3.27$, $p < .001$ ）。

比較の様態については、 χ^2 検定 ($p < .05$) の結果、4年生は5年生よりも、“他者評価”のための比較、“ストレス解消”のための比較、比較後の“羨望・嫉妬”、を記述する割合が有意に多かった。

また、有意傾向ではあったが、5年生よりも4年生において比較の相手を“できる人”を選ぶ割合が多かった。4年生は5年生よりもまだ有能感が高いために、自分よりもさらに“できる人”を選ぶのかもしれない。あるいは、4年生の時点ではまだ、自己評価のためには類似他者との社会的比較が必要である、ということに気づいていないことも考えられる。今後、被調査者の枠を広げたさらなる検討が望まれる。

(5) 社会的比較の様態に及ぼす性別の影響

性別によって比較頻度、比較の相手、比較の対象、比較の気分、比較の理由、比較の結果、および被評価感における各カテゴリーに該当す

る記述があった割合を示したのがTable 5である。なお、Table 5では性別による有意な人数の偏りが見られないカテゴリーは省いた。

比較頻度に関しては男子よりも女子において多いという結果が得られ（男子；1.95，女子；2.38： $t=3.31$ ， $p<.001$ ），児童期においては女子のほうが他者と比較することが多いということが示された。

比較の様態については、 χ^2 検定の結果、男子は女子よりも、“競争意識”のための比較（ $p<.05$ ），“自己向上”のための比較（ $p<.05$ ）, 比較の結果の“影響なし”（ $p<.05$ ）, 被評価感での“影響なし”（ $p<.01$ ）を記述する割合が有意に多かった。一方、女子は男子よりも、“落ち込んでいるとき”の比較（ $p<.05$ ）, 被評価感での“否定的感情”（ $p<.01$ ）を記述する割合が有意に多かった。

男子のほうが女子よりも“競争意識”のための比較，“自己向上”のための比較をしていることが多いが、これはわが国における男性の競争社会を反映しているのかもしれない。例えば、児童期の男児がよく見る少年マンガは、「努力」「勝利」という標語に結びつくテーマが選択されることが多いという。少年マンガで、克己努力の人が多く描かれているから、それを読む子どもも競争的で努力をする人になるというのは、あまりに単純であるが、何らかの影響を及ぼしているのではないだろうか。

また、男子においては被評価感で“影響なし”と女子よりも有意に多く回答しており、児童期男子においては、他者からの評価に対して女子ほどは懸念を抱いていないものと思われる。

一方、女子のほうが男子よりも“関係配慮”のための比較が有意に多い傾向にあったが、これは、女子は男子に比べて周囲との関係性を保持しながら発達していくとされている（加藤・高木，1980）という指摘と一致する。また、本研究において女子のほうが男子よりも公的自己意識得点が高い（男：32.36，女：37.85： $t=4.98$ ， $p<.001$ ）が、これに加えて、被評価感において“否定的感情”を感じる女子が男子よりも有意に多く、児童期の女子は他者

からの評価に敏感で懸念（否定的感情）を持っていることがわかった。

また、女子においては“落ち込んでいるとき”の比較，“羨望を感じているとき”の比較，などネガティブな感情の時に社会的比較が行われやすいことがわかった。このことから、自己への苦痛や脅威を回避するように比較を導く快楽的圧力（hedonic）が女子における社会的比較の場に作用していると考えられ、そのためにFestingerの社会的比較過程理論が女子においては当てはまらない（Brickman & Bulman, 1977）ことが予想される。この点に関しては今後の更なる検討が必要であろう。

ま と め

本研究では、児童（小学校4，5年生）における日常生活場面での社会的比較について、その様態とパーソナリティ要因（公的自己意識，自尊感情）ならびに年齢や性別が及ぼす影響について探索的に検討した。社会的比較の様態においては外山（1999）とほぼ同様の結果が得られ、児童においてはFestinger（1954）の社会的比較過程理論では扱っていない結果も得られた。また、児童における社会的比較の様態は、青年（高田，1993）のそれとも異なり、児童期に特徴的な比較の対象や比較の理由があることが示された。

社会的比較の様態に及ぼすパーソナリティ要因の影響については、まず公的自己意識の高い人はそうでない人よりも比較を行う頻度が高いが、特に落ち込んでいるときに、他者のことを知るためや他者との関係を配慮するために比較を行い、その結果、否定的な感情を抱くことが明らかにされた。

自尊感情においては、その高低で社会的比較を行う頻度に差は認められなかったが、社会的比較を行う機能が異なることがわかった。自尊感情の低い人は自分の劣等さを再確認するため（自己卑下のため）に自分よりもできる人と比べるために、その結果、否定的な感情を抱くという悪循環に陥っていることが考えられた。これ

らのことより、自尊感情を高揚させるためには、社会的比較に関する認知を変容させることが重要になってくるものと考えられる。

本研究の結果より、児童期において社会的比較に従事しやすい人の特徴は、自分に自信があるのかないかということではなく、対人志向的で他者の行動により敏感であるということがわかった。また、それにも関わることであるが、周囲との関係性を保持しながら発達していくと言われる女子において社会的比較に従事する傾向が見られた。年齢の要因については、本研究の被調査者が小学校4、5年生のみと非常に幅が狭く、今後被調査者の枠を広げたさらなる検討が必要とされる。

わが国における子どもを対象とした社会的比較に関する研究は、まだ始まったばかりであり、今後の研究が待たれる。

引用文献

- Brickman, P. & Bulman, R. 1977 Pleasure and pain in social comparison. In J. Suls & R. Miller (Eds.), *Social comparison process*. Hemisphere. Pp. 149-186.
- Butler, R. 1989a Interest in the task and interest in peers' work in competitive and noncompetitive conditions: A developmental study. *Child Development*, **60**, 562-570.
- Butler, R. 1989b Mastery versus ability appraisal: A developmental study of children's observations of peers' work. *Child Development*, **60**, 1350-1361.
- Butler, R. 1992 What young people want to know when: Effects of mastery and ability goals on interest in different kinds of social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 934-943.
- Festiner, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Gibbons, F. X. & Buunk, B. P. 1999 Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- 加藤隆・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, **28**, 72-76.
- Masters, J.C. & Keil, L.J. 1987 Generic comparison process in human judgement and behavior. In J. C. Masters & W. P. Smith (Eds.), *Social Comparison, Social Justice, and Deprivation*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 11-54.
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 サイエンス社
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85-94.
- 桜井茂男 1993 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, **29**, 203-208.
- 高田利武 1981 対人恐怖と社会的比較 年報社会心理学, **22**, 201-218.
- 高田利武 1990 社会的比較—その発達過程— 三隅二不二・木下富雄(編) 現代社会心理学の発展Ⅱ ナカニシヤ出版 Pp. 92-115.
- 高田利武 1993 日常事態における社会的比較の様態 奈良大学紀要, **22**, 201-210.
- Taylor, S. E. & Lobel, M. 1989 Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- 外山美樹 1999 児童における社会的比較の様態 筑波大学発達臨床心理学研究, **11**, 69-75.
- 外山美樹・桜井茂男 1998 大学生における自尊感情、日常的出来事、およびストレス反応の関係 筑波大学心理学研究, **20**, 115-133.
- Wayment, H. A., & Taylor, S. E. 1995 Self-evaluation process: Motives, information use, and self-esteem. *Journal of Personality*, **63**,

729-757.

Wood, J. V. 1989 Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, 106, 231-248.

山本眞理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.